荒尾市立府本小学校　校長便り　№３４

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和７年９月１６日(火)

徒然

先日、ある児童が校長室を訪ねてくれました。この「みんなの居場所」の裏に載っている問題を解いて持ってきてくれたのです。これまでも、数名の児童が校長室を訪ねてくれていたのですが、問題を解いてきてくれる児童は比較的少なく、少々残念に思っていたところでした。今回来てくれた児童は、問題を解きつつ、その理由を文章で説明してくれていました。文章で説明する力は、これから社会に出ていくための子ども達にとってとても大切な力です。答えを確認すると、完璧でした。私は頑張ってくれたお礼に、私が描いたイラストのコピーをプレゼントしました。するとその子は「ありがとうございました。また、解いてきます。」と丁寧に挨拶をして帰っていきました。

「みんなの居場所」の裏の問題や「意味調べ」にチャレンジすることは、これから中学、高校と進学していく中で結構役に立ちます。（私の経験則）答えが違っていても挑戦する気持ちが大切ですから、来てくれた子ども達にはいつもイラストをプレゼントしています。おうちの人と一緒に挑戦してみてもいいよと伝えてありますので、保護者の皆様、団らんの話題の一つに加えてみてはいかがでしょうか？

詩から学ぶ　責任の矛先は自分に向けて

詩は良いですね。感性がそのまま表現されるというか、表現の幅に感動します。紹介します。私の好きな詩です。

「自分の感受性くらい」　茨木のり子

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて
気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか
苛立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのはわたくし
初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもが　ひよわな志しにすぎなかった
駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄
自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

私はこう思いました。すべての結果には原因があり、その責任は自分にあるんだと。責任の矛先を自分に向けることで、次の手だてが見つかるのではないかと。私もついダメだったことを人のせいにしてしまっているので、「いかんいかん」と自分を戒めています。人の非ばかり責めていると気持ちが暗くなってしまいますね。

シリーズ「自分を語る」#３４

黒石原2年目に入り、私は重症疾病児童生徒の部に移りました。脳性まひ、フェニールケトン尿症？だったかな、肢体不自由など、多くの難病と闘う子ども達が学んでいました。そこに通う子ども達は、殆どが再春荘病院の小児病棟から通っていました。中には、人工呼吸器を付けている子もいます。食事は経管栄養でした。自力歩行で通う子は少なく、柵が付いたストレッチャーに乗って登校します。そして、最も面食らったことは、「授業で何を教えるか」です。当時から、養護学校（現特別支援学校）は独自の教育課程が展開されていました。そこでの子ども達は学習よりも訓練に特化された授業を展開していました。当時「養護・訓練」といって、生活を営む中で必要な行動（反応）を、どのようにして身に付けさせていくかが重要でした。快、不快の表現をどのようにして行うか、空腹の訴えをどのように行うか等、子ども達が生きていくために必要だと思われることを、保護者、職員チーム、医療チームで協力して洗い出し、個別に指導計画を作り、展開していくのです。現在は「養護・訓練」は「自立活動」と呼ばれていて、特別支援教育に携わる先生方が最も専門知識や技能を発揮する教育です。私たちは医者ではありませんので、学習上、生活上における困難の克服のため、子ども達に必要なことを教育者の視点に立ち、考えていきます。ここでの経験は、今の自分にとても役立っていると言えます。

この部に異動してからは、子ども達を抱えることが以前にも増して多くなりました。前年度から違和感を抱いていた腰が、少しずつ痛みが増していることに気が付きました。「あれっ？　なんでこんな時に痛むの？」でも、まだまだ「自分は若いんだ。腰が痛いなんて言っている場合じゃないぞ。」と自分を鼓舞し、仕事に集中する日々が続きました。がむしゃらという言葉がぴったりの毎日です。この時期は、体が悲鳴を上げていることにすら気が付かず、自動車に例えるならば、エンジン・オイルが入って無い状態でした。オイル無しでトップスピードを出している状態です。この状態が続くとどうなるかは明白なことです。そして、ある日の朝、布団から起きた時、腰の痛みで真っ直ぐに立てない自分に愕然とします。起床時に激痛を覚えた私は、ひならぬ状況でしたので「病院に行かなければ！」と、しっかりと自覚して生活するようになります。しかし、不思議なもので日常生活を営む中で夕方頃には痛みが和らぎ、同僚から誘われるバドミントンにも興じていました。このバドミントンも良くなかったようです。バドミントンは本格的にやり始めると、かなりハードなスポーツなんです。私は体が硬かったためにケガも多かったのですが、プレー中はそんなことはお構いなしです。同期から「お前、腰が痛いなんて年幾つや？」等とからかわれると、余計に意地になって腰を酷使していました。

ある日、同僚から「澤田先生、体傾いてるよ。」と言われ、鏡を見ると確かに傾いています。これは、腰の痛みが軽減する方へ無意識のうちに体を傾けているんですね。いわゆる防御反応です。「いよいよか。」と自分に言い聞かせ、学部主事（小学校で言う学年主任のようなもの）に、「検査のため入院させてください。」と告げました。この時点で相当悪化していたらしく、病院では「椎間板ヘルニアです。かなり重症です。手術の適用です。」とあっさり告げられました。それでも、知識が無いということは怖いもので、私は痛み止めで何とかなるだろうと簡単に考えていました…。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）